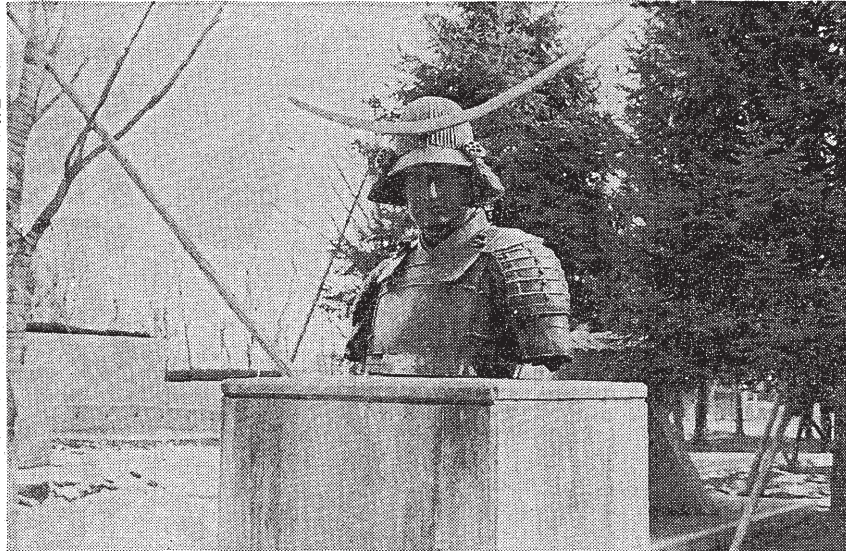


出陣した初代の政宗騎馬像は無残な姿で、復員した、今は山台市博物館の庭に建立されている



政宗騎馬像余話

小室達・日記から



▷10

屋を探し出し、その後をたどって、とうとう青森の波止場まで追いかけてきました。その後はどうしてもわかりませんが、小室先生は青森の港で、夕日が沈むまで銅像の行方を思っで立ちつくしていたということです。

このくだりは、昨年三月発行された県教委の小学校道徳郷土資料どうとこの「二生を彫刻にささげた人」にはそのまま採用され、子供たちの心を打っている。小室の日記には青森行きの記事は見当たらず、今となっては事実がどうも確かめようもないが、小室の思いをこれほど多く伝えるエピソードもほかにない。この言い伝えを素直に信じていたいと思える人が多い。

◇ こうして撤去された騎馬像

集積所でなべやかまの中からはかりで結局はず鉄同然の扱いだ。たのである。

「戦後、モノが自由に言えるようになりましたから、ただ壊されただけだ」とくやしがついていました。カマに入って溶かされて武器にでもなっていたならば、その時点ではすよ、いくら何でも国のお役に立ったとあきらめもついでしょ。壊されただけではすから。壊さずにも少し置いといてくれれば、元に戻せたかもしれないなかつたでしょう。」

小室は二十八年六月十八日、東京の病院で肺結核で亡くなった。前の年の暑い盛りに、生活費の足しにしようとして茶わんや陶板の帯どめなどを二十四時間つきっきりで焼き上げ、体力を消耗したらしく。昭和十年、小室が経験した二度と訪れなかつた。享年五十三歳。

挿話 思い伝える

くず鉄の中で

伊達政宗騎馬像の「出陣式」が十九年一月二十一日に行われた後、実際に銅像が撤去されたのがいつだったのか定かではない。旧制白田出身で小室達の後輩に当たる島清雄さん(モロ)「岩沼市在住」は、オエラ方が集まった出陣式とは別のひとつの「出陣式」を記憶している。

当時、仙台市の宮城野国民学校の教師だった島さんは、校長から「プラスチックの部員を連れて大空急ぎ乗山に行ってくれないか」と頼まれた。天守台に着くと市内の学校から百人ぐらいの生徒が集まっている。「生徒たちを集めたお別れ式だったんでしょう。プラスチックがあったのは宮城野だけでしたから、私が指揮して、全員で仙台市民歌を歌いました。帰りにもう一度歌を振り返ると、小室さんがいるんです。じつと像を見上げて動かない。目に涙が光っているように見えました。」

ここで一つの「言い伝え」を紹介したい。小室が銅像の行方を追って、青森まで追いかけたという話である。忘れ去られた小室を「再発見」し、その業績や人となりを研究している柴田町根木小校長後藤彰三さん(モ)は研究資料「ふるさと教育 彫刻家小室達」のなかで次のように記している。「苦心さんたんし作り上げた銅像が戦争のためとはいえ、溶かされたたの銅と鉄のかたまりになつてしまつたのです。こうやって送り出したものの、小室先生は銅像の行方が気になる、運んだという通説が戦後間もなく塩釜の金蔵

騎馬像が完成した年の十月に生まれ、小室を狂喜させた長男・稔嗣さん(モ)は、この時の父・達の思いをこう語った。

「戦後、モノが自由に言えるようになりましたから、ただ壊されただけだ」とくやしがついていました。カマに入って溶かされて武器にでもなっていたならば、その時点ではすよ、いくら何でも国のお役に立ったとあきらめもついでしょ。壊されただけではすから。壊さずにも少し置いといてくれれば、元に戻せたかもしれないなかつたでしょう。」

小室は二十八年六月十八日、東京の病院で肺結核で亡くなった。前の年の暑い盛りに、生活費の足しにしようとして茶わんや陶板の帯どめなどを二十四時間つきっきりで焼き上げ、体力を消耗したらしく。昭和十年、小室が経験した二度と訪れなかつた。享年五十三歳。

◇ 小室が世を去ってから間もなく、天守台の騎馬像が置かれた台座に、今度は白セメントで作られた平服姿の政宗像が建てられた。稔嗣さんは「父は恐らく平服像のことは知らなかつたでしょう」と言う。知つていれば無念の思いは、ますます募るばかりだつたらうから。」